

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究(三十一)——

津 守 真

五歳の子どもが、こんなに他人の気持を理解し、他人に対して温かい関心を持っているのかと驚かされたことが幾度かある。五歳になるとそれが言語を伴って表現されるので、こちらも驚くことになるのだが、それは五歳で突然わかるようになったのではなく、それまでの五年間の毎日の生活の中で、子ども自身が他人との間で体験してきたことの積み重ねの上に成り立っていることである。子ども自身が、おとなから温かい関心と理解をもって扱われた体験がなかったら、他人に対して同様の態度で接することはできないであろう。こういうことこそ、幼児期に生活の中で体験できることであり、それによって子どもは生物的存在から人間へと成長してゆくのである。

あげること・贈ること——他人への積極的関心

8月9日

A 「ね、キフってどういうこと？」

私 「どういうことだと思う？」

A (ためらいながらいう) 「ものをあげることでしょ？」

私 「そう」

A 「こないだ お店やさんで、ほうずきをくれたのキフ？」

私 「それはおまげだね」

A 「あ、そうそう、オマケ」

子どもがこういう質問をするのは、このことはの意味すること  
を、子どもは漠然と分っていて、それをおとなに確かめたいから  
であろう。このことばでどういうことを考えているのだろうか  
と  
思つて、私は「どう思うことだと思ふ？」とたずねる。Aは自分  
の考へていることが合っているかどうかためらいながら、「もの  
をあげることでしょ？」と云う。「寄付」という語に含まれる社  
会的価値や対人関係は、子どもの理解の中にはないだろうが、そ  
の基底となっている行為は、子どもは体験し理解しているように  
思われる。寄付という行為の中核をなしているものは、他人に金  
や物をあげることに、すなわち、ものをおくることであつて、心を  
こめて他人に物を差し出すことである。

Aはすぐにそれと類似の行為を思い出す。八百屋で野菜を買つ  
たときに、やおやのおじさんが子どもに差し出してくれたほおず  
きのことである。それは具体的な行為においては寄付と同じであ  
る。しかしそれは品物を買ってくれたときに、値引きする代りに  
付加してくれる物であつて、「おまけ」である。

Aは他人に物を贈ることに関心をもっているので、こういう質  
問が出たといえよう。

10月4日

A「赤い羽ってどうするの？」「困っている人にあげるの？」

私「0さんの養護施設にもいくんだよ」

A「0さんのとこ、おこづかいももらうんだよ」このことを何回  
も云う。

ここでも、赤い羽について質問するとき、その答えを子どもは  
漠然と分っている。それで「困っている人にあげるの？」と重ね  
て質問する。私が知人の0さんの働いている養護施設にもいくこ  
とを云う。Aは先日0さんがきたとき、養護施設の子どもはお小  
遣いをもらう話を熱心にきいていた。五歳のAはお小遣いをも  
っていないから、Aにとってはその子どもたちのところに赤い羽  
のお金がいくというのは納得できないらしい。

Aがこういう質問を口に出してするのは、他の人に何かをあげ  
ることがAの心の中で一つのテーマになっていることを示  
すものであろう。

12月30日

朝、床の中で

A 「きょうはPちゃんのお誕生日ねー、お母ちゃまと、なんのケーキにするか考えようねー。YちゃんはPちゃんに、イヂワルシナイっていうお誕生日にするといいわ」

きょうだいの誕生日は、子どもにとっては楽しみなお祭りである。妹の誕生日にどんなケーキを作るか、朝目が覚めたときから、たのしみである。そういう一日の朝は、なんと明るく希望に満ちていることか。

妹の誕生日に何かを贈るとき、その人にふさわしい贈り物は何であるかをAは考える。そして、もう一人の妹のYちゃんは、意地悪しないというお誕生日がPちゃんにふさわしいという。そこで差し出すものは、物ではなくて精神である。その相手に喜んでもらえるものは、意地悪しないという心であり、それは自制によってつくり出される精神である。

1月31日

A 「そういうときって、たいがいの人は怒りたくなるわよ。あたし 病気のとき、けいけんしたことがあるわよ」

妹のYがお腹がすいて、おとなが何を云っても怒りたくなかった

話を母親がしたときのことである。

他人が怒るとき、同様の自分の経験を考えて、怒りたくなるときの心に共感し、それを客観的に見ている。他人の心の存在に對する関心と云えよう。

五歳児の後半の時期には、ここに掲げたことに類似した例を、他の子どもたちについても見ることができると云うことができる。この時期には、一般的に云っても、他人の心に対する積極的な関心が出てくると云うことができそうである。おとなにこのように純粹な認識があるだろうかと思えるくらい、他人の心に近づいた理解の仕方、他人に對して積極的な関心をもっている。こういうことは、おとなになるにつれて進歩するとは云い難いものようである。知的な理解はもっと進むかもしれない。しかし、他人の心に対する心情的な共感、もっと鈍ってくるようにすら思える。それは、子どもにふれることによつて、おとなの心の中にも新たに回復されるものでもある。

こう云つても、子どもはいつでも他人の心に対する共感的関心を抱いているわけではない。次の瞬間に、子どもは、妹のもっているものをキュと取り上げて泣かしてしまふのである。怒らない

ためには、自製の努力を必要とするのである。

## お母さんに時間をあげる

2月15日

数日前に、中川季枝子作の『ももいろのきりん』を買ってきた。Aに母親が最初の方をよんでやったが、字が多い本なのでなかなかとりつけなくて、少し読んでは放ってあった。昨日、一時間くらい、居間のソファに坐って、自分で全部読んだ。私がどこが面白かったかたずねたが、なかなか口からことばが出てこない。母親が「魔法の画用紙がほんものになるところが一番好きだ」というと、Aは、「そうなのよ、あたしもそこがいちばん好きなのよ」と云う。この本が一番のクライマックスのところを理解しているように思われた。

そのあと、Aは「マホウの画用紙」と云って、画用紙に家の内部のえをかき、もう一枚つなげてつづきをかき、さらにもう一枚、合計三枚をつなげて家の内部を描く。そして云う。

A「マホウの画用紙のなかのお母さんは、あみものするの、お母

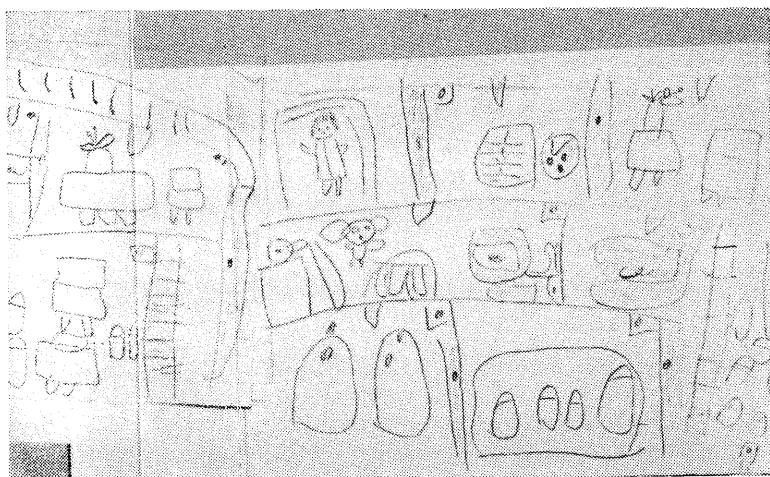
さまには時間をあげるわ、あみものをするひまがあるのよ」

Aの母親は小さい子どもたちの世話に忙がしく、坐って編物をするひまなどない。Aはそのことをよく知っている。Aの母親にとって一番よい贈りものは、自分のことをする時間である。それでAは云う、「お母さまには時間をあげるわ、あみものをするひまがあるのよ」

このときかかれた描画(図1…次頁参照)をみると、これは子どもの頭の中にある象徴的な描画である。玄関の入口には、履き物が不均整に並べられていて、家に入るとき子どもたちの動きを示している。ドアはそれぞれピンクのクレヨンでぬられ、把手がついており、独立した部屋がいくつもある。梯子があつて、二階がある。各部屋には天井から突起が出ていて、黄色でぬられており、電灯が明るく照している。それぞれの部屋には、違った形が描かれていて、部屋によって特色があることを示している。ある部屋には戸棚があり、ある部屋には水道がある。卓子や椅子、花瓶、皿などのある部屋もある。何を示しているのか分らない物もある。

これは魔法の画用紙だから、この家はほんものになって出てく

▼ 図 1

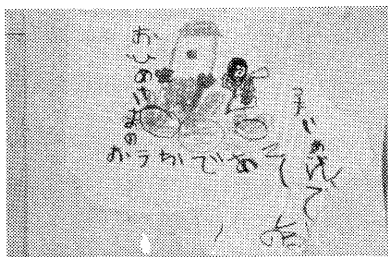
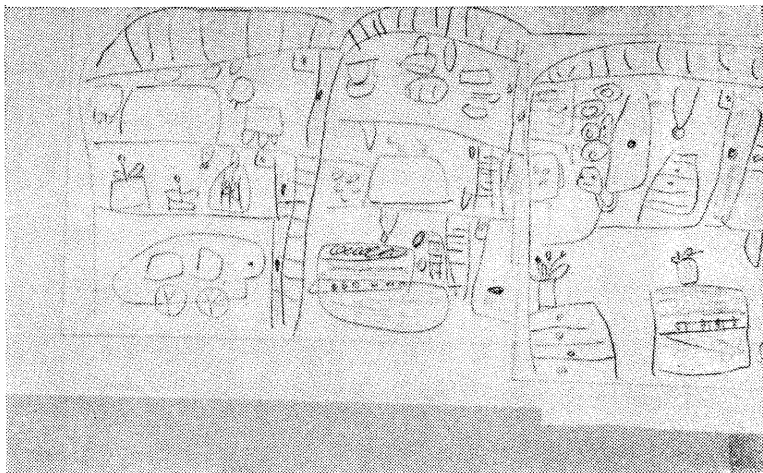


る家である。こんないろいろな部屋があるといいなあと子どもは思っているであろう。その家の中で、母親にはあみものをする時間（そしておそらく空間も）が与えられる。ここには母親に対する親しい関心が見られる。また母親が内心で欲しているものに対する内側からの理解がある。

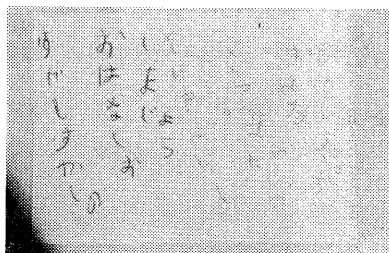
### 文字と思想

この本は字が主になっていて、挿絵が少ない。五歳児にとって、これだけの字の並んでいる本を全部よみきるのは容易でないはずである。Aは文字の読み書きについては、クラスの中でも早い方だったわけではない。また家庭でも、字を教えたり書き方を直したりしたことはない。けれども、字に関心が出てくると、たえずおとなにつきまといつたが、先生や親を困らせた。

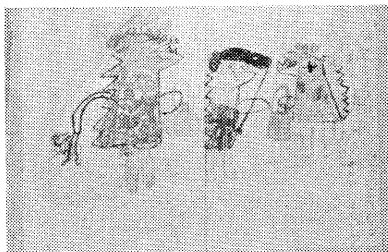
写真1は、五歳児の一学期五月にかいたものである。左上からはじまり、前半は青のクレヨン、後半は赤のクレヨンでかかれている。「むかしむかしのおはなしおもしろい、それわほらあなぐまちゃんのおはなしおもしろい」と判読できる。



◀写真2

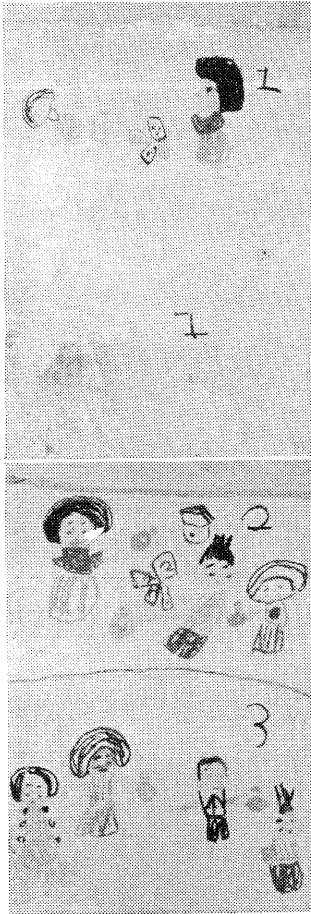


▲写真1



◀写真3

▼ 写真 4



五歳児二学期以後は、えをかいたとき、文字で補足をつけ加えることが多くなる。「おひめさまがおうちであそんでいるの」「おもしろいほん」「みんなのおうち」など、その字は不齊な部分が多いが、文字が描画の一部分をなしている。(写真2・3)

また、五歳児の秋には、小さい子どもたちが遊んでいるときも、ひとりだけ絵本をよんでいることがしばしば見られるようになった。次第に、文字が考えの世界をあらわすこと、また、自分も文字で思っていることをあらわすことを知ってきたようである。自分がおはなしをつくりながら、おとなにそれを筆記してもらうことが多くあり、丹念につきあうと、そういうときには目を宙に凝らして、精神を集中させた。もちろん、まだ描画で表現する方が

気楽であり、その方が多いのであるが、自分で精神の緊張を文字に向けることができたときには、自分の感情を文字に表現することに成功することもあった。写真4はその一例である。

「〇ちゃんがわたしがとらんぶだしてきたのおみていました  
 そしておかあさんとおとうさんと おにいちゃんと とらんぶお  
 しました それわうすのろまぬけでした おとおさまが おだい  
 どころから みかんおだしてきました でも 〇ちゃんがたべて  
 しまいました それでよか(っ) たんです おとおさまがみかん  
 おひとつ おおめにも(っ) てきたんです それからうすのろま  
 ぬけおしました さいしょに おとおさまが…… しませんでし  
 た それから わたしがないて  
 しまいました どうしてないて  
 しまったか おはなししましよ  
 うだ(っ)て おとおさまが  
 わたしがみかんおたら(おいた  
 ら)おとうさまが ひ(っ)ば  
 (っ) たんだもん きょうわ  
 ここまでにしておきましょ  
 う  
 かわ きょうわきょうならにし

ましよう 1 がつ 22 ち

ひとたび文字の面白さを知った子どもは、自分の心の中にあることを、文字で表現しようとする。少し前までは、文字を一字かくのも容易でなかった子どもが、自分で表現しようとする内容を持つているときには、忽ちそれを使いこなすようになるのは驚くほどである。早くから文字を教えたり矯正したりしていたら、自分の心にあることを気楽に文字に並べることをしていないであろう。むしろ、生活の内容を豊富にし、人の心が分るようになっていくことが、幼児期にしておかねばならないことである。それをどうやって表現しようかと、子どもは苦心し、それによって技術としての文字も、思想表現の道具としての文字も、両方を習得していくのである。早期に文字を学ばせようとするために、おとなとの信頼関係や、友だちと十分に遊ぶという基本的な体験の機会を犠牲にしてはならない。

他人の気持を考え、他人が欲しているものをあげることを、贈ることは、Aがこの数カ月間、自分自身のテーマとしてきたことであつたと思う。それは、子どもがずっと小さいときから、自分が

求めているものをおとなから与えられて満足した体験、きょうだいや友だちとの間の葛藤の中で子どもなりに考えさせられた体験によって、自分自身の中に形成されてきたテーマであると云えよう。それが五歳の後半になって、言語や文字の理解力や表現力の増大に伴い、明瞭な輪廓をもって認識されるようになったのである。五歳の後半は、このように、幼児期の体験が集約されて花開くような時期である。からだで体験し、心で感じ、そのイメージが集積されて人間の精神が形成されてゆくその一つの階段がここにある。この基本的な体験は、ここではまだ最初の認識の段階である。この後、成長と共に、くりかえしいろいろの形で体験され、再認識されてゆくのであるが、この五歳児の段階における体験と認識は決して幼稚なものではない。それはおとなになって思い起すことがあるならば、はっとするような、純粹な原体験であろう。ここに掲げたのはAにおける一つの具体例であり、子どもによって、幼児期に体験されるテーマは異なる。また、幼児期を十分に生きることができないと、内心の重荷の解決のためにエネルギーを消費させられて、人間的成熟へ向う体験をすることができないままに過ぎてしまう。幼児期に子どもは十分に遊ぶことが必要であり、そのためにもきめのこまかい保育がたいせつなのである。

(つづく)